くじら、くはのものさしに、やなぎのかきいたを御もちひ候、

〔本朝度量權衡考 度〕乳母冊子ニクヂラ、クハノモノサシトアルハ、鯨魚鰓又ハ桑木ニテ作リタル尺ト云フコトニテ、曲尺一尺二寸五分ノ鯨尺ニハアラズ、

〔雅筵醉狂集 春〕藤花

咲花のはなのしなひをさしみればしかも鯨の三尺あまり

伊勢物語に、あやしき藤有けり、花のしなひ三尺六寸ばかりなん有ける、　鯨は金さしより長し、

〔風流曲三味線 四〕帶とかぬ枕物語

禿の市彌、大臣の御乘物の見える程は立止りて、お土産に、鯨尺を買ふて來て下さんせといへば、雲八可笑く、鯨尺を土産に貰ふて何にすると問へば、大夫さまに、延びさんした客さん遠の鼻毛を度すと、是を大笑ひにして、機嫌能く廓へ歸りぬ、

〔獨語〕婦女の帶は、金襴を美麗の限とし、黑地に梅櫻松を所々に織つけて、是を鉢の木の帶となづけて珍重しけり、廣さ僅に鯨尺の二寸ばかり、紙を心として、綿などいるゝことなし、四月より八月迄、婦女の禮服に綿にて、廣さ鯨尺の八分ばかり成るを、後を結てたるゝを、つけ帶といふ、〇中略男子も女子も十四五歳までは、長き袖を著るに、昔は鯨尺の一尺七八寸を極とせしに、貞享の比より二尺計になり、それより漸くます〳〵長くなりて、ちかき比は二尺四五寸になりぬと見ゆ、婦女の帶も、貞享元祿の比より、やうやく廣くなりて、今は鯨尺にて八九寸におよべり、綿を心として褥の如し、男の肩衣といふ物、昔は麻の幅、鯨尺の八寸ばかりなりしに、貞享元祿の比より、幅一尺におよべり、

〔地方新書〕或書に、〇中略享保尺はともに、曲尺より四厘を強くす、訛長なるべけれど、是亦一種の度

享保尺